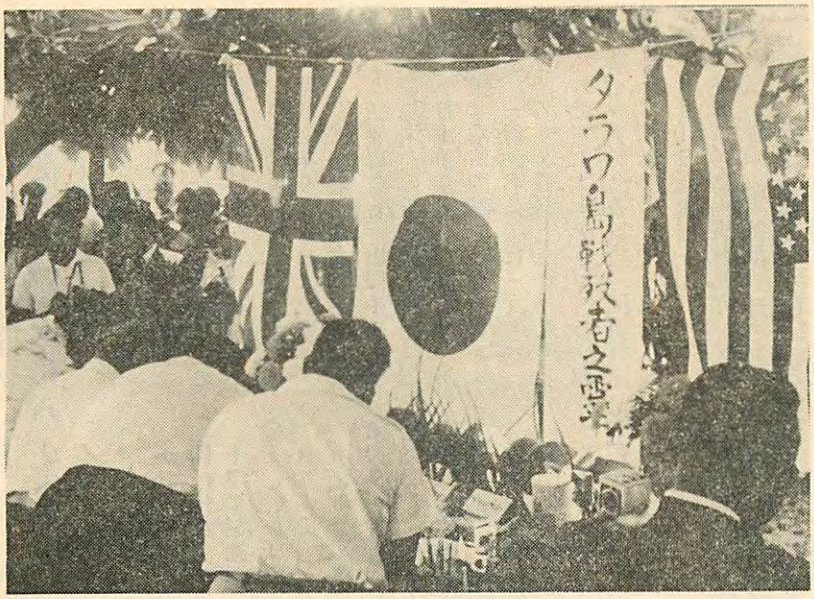


タラワ島慰霊祭（52・8・16）

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
郵便番号 154
世田谷区野沢3—11—3
電話 東京（424）4300
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　浮田信家

追悼の詞（ことば）

謹んでナウル（タラワ・マキン）島に眠る、日本海軍の将兵六五九柱（四四五五柱・五八八柱）の御霊に申し上げます。私達二六（二二）名は本会を代表し、只今ここに参りました。

あなた方が、この島で散華されてから、早や30余年の歳月が流れ、今、目のあたりにするこの島は、あの激戦があったとは思えない平和な島となっております。

この島の長老の方々は、今なお日本語を交えながら、あの激戦の有様を子や孫に聞かせております。本会は今から14年前に結成され、毎年靖国神社であなた方の慰霊祭を行ってまいりましたが、私達遺族は、どうしてもあなた方の最期の場所や、島の様子などを知りたくてここに参りました。

本会に寄せられた記録や資料、又あなた方が故郷に送られたお便りから、この小さな島、食糧にも事欠く最悪の条件下での連日の苦戦、今際のきわに母の名を呼ばれ、最後の呼吸の中から君が代を口ずさまれた姿が偲ばれます。

どんなにか残念であったでしょう。せめて援軍の到着を待って思うまま、反撃に出たかった事でしょう。我が国は、敗戦によって、多くの国土を失い、私共は一時は全く途方に暮れましたが、臥薪嘗胆の結果、秩序をとり戻し、経済の躍進と相俟って、世界に頭角を現わすに至りました。

遺族に対する恩給も、あなた方の御功績に対する位勲も復元され、社会福祉も充実し、遺族各位の血の滲むような努力も報いられて衣・食・住も戦前を凌ぐ状態になりました。

あなた方の遺された子弟は、各方面に活躍しております。どうぞ御安心下さい。この度私達の慰霊に際し、当地官民の方々から、特別な御厚意を寄せられ、あなた方を殉国の英雄として名誉を称え、敬虔な祈りを捧げて下さいます。

今ここにお供えいたす品々は、何れも日本から遙々持参して参ったものです。懐しい故郷の香りと、遺族の心づくしを召上って下さい。

茲に本会々員及び戦友に代り、謹んで追悼の辞を捧げ、安らかにお眠り下さることを心からお祈り申し上げます。

昭和52年8月15日

マーシャル方面遺族会
会長　浮田信家

目次

追悼の詞……(1)
第二回現地慰霊団の足跡……事務局(2)
タラワ島に於ける戦歿者の遺骨について……嶋田正彦(3)(3)
遺骨処理報告……ジョン・スミス(3)
ナウル・ギルバート現地慰霊団に参加して……伊藤博美(4)(4)
……井田直忠(5)(4)
……太田清(5)
一滴の水……嶋田正彦(6)
タラワに眠る弟を訪ねて……津久井艶子(6)(6)
……塚原ハナ子(7)(6)
……長尾静子(7)(7)
義学院玉岩明倫居士にまいる……藤沢昭(7)
……星川武(8)(8)
……水野ハナ(9)(9)
……谷沢英子(9)(9)
ナウルの想い出……江村源次(10)(10)
……香月正紀(11)(11)
……土岐正(12)(12)
……安藤サヨ(12)(12)
短歌・俳句　七首……浮田桜代(13)
偶感……浮田信家(13)
第三回現地募参希望者募集……会長　浮田信家(14)(14)
参考　米信託統治領のミクロネシア……(14)
昭和53年2月6日（月）……(15)(15)
慰霊祭＝六日（月）
報告会＝六日（月）
直会旅行＝六・七日
霞ヶ浦と筑波の御案内
新聞抜萃……(16)(16)
中国新春随想　薬師寺理助……(16)(16)
朝日……(16)(16)
日経……(16)(16)
寄付者芳名……(17)(17)
事務局だより……(18)(18)
戦記シリーズ……(19)—(22)(22)

第二回現地慰霊団の足跡
ナウル島・ギルバート諸島

事務局

当初8月10日羽田発の予定で準備を進めて来たが、出発直前、日本航空の都合で、出発日だけを一日早め、浮いた一日はグアム戦跡見学に充てた。

第一日　昭和52年8月9日（火）

○七三〇　羽田空港内日本航空団体旅客ターミナルに集合。出国手続、お供物及び現地えの土産用免税品購入

○九四五　日本航空九四一便ジャンボ機に搭乗。羽田国際空港発。グアムに向う。一行26名（男18・女8）

一四一〇　グアム国際空港着。入国手続後バスでリーフホテル（タモン海岸）着。夕食時会長挨拶、団員同志自己紹介、懇談。

第二日　8月10日（水）

午前、バスにて島内戦跡見学。アガニア市街から米海軍基地、ニミッツビーチ、マゼラン記念碑、ジーゴ古戦場慰霊碑、日本軍防空壕等をまわり途中香港飯店で昼食。ショッピングのあとホテルで明日の出発が早くなったので仮眠、休養。

第三日　8月11日（木）

午前〇時　ロビーに集合。バスにて空港に行き、出国手続をすませる。

〇二〇〇　ナウル航空四二一便搭乗、ナウル島に向け出発。スチュワデスが日本人だったのでナウルの近況が聞け好都合であった。右正横近く南十字星を確認した。（高度・一万米）

〇七〇〇　ナウル空港着。ジョン・ウィリー氏迎えに見える。バスでメンネンホテル着。休養。付近散策。

第四日　8月12日（金）

〇九〇〇　外国人墓地（10年前と同位置）で慰霊祭。会長追悼の詞の後一同焼香中土岐氏の尺八阿字観の謹奏は参列全員の胸を衝く。服装全員黒。

一四〇〇から戦跡、燐鉱石採掘所、中心街をバスで廻り、一旦ホテルで休憩後更に一六三〇から午後6時まで島内一周、ブアダ湖畔の戦跡も見る。

一九三〇　レストランさくらでウィリー氏夫妻との懇談、ナウル班とのお別れのパーティーに賑う。

第五日　8月13日（土）

一〇二五　ギルバート班（22名）ナウル航空三二〇便でタラワに向け出発（ナウル班は一四〇〇ナウル発グアム一泊の上14日羽田帰着の予定）

一二〇五　タラワ空港着。入国手続後ダットサン等でオシンタイホテル着

夕食後懸案のベシオ島残存遺骨処理につき団員の構想をまとめ、明日に備える。

第六日　8月14日（日）

休日につき官庁等の訪問は見合わせ一同ベシオ島戦跡廻りにゆく。バイリキからフェリーで20分。桟橋からマイクロバスで廻る。太田清氏等復員者の実戦体験談話を中心に感深く巡視。市庁舎倉庫に遺骨の保管状態を見る。散乱してあり、一応収集。木箱に納め供花、供物、一同で焼香する。島民地区のレストランで軽食をとり夕方ホテルに帰り、明後日の慰霊祭の準備作業を行った。

第七日　8月15日（月）

一〇三〇　団長・副団長・副会長政庁にジョンスミス総督を訪れ、明日戦争記念公園で慰霊祭を行う件と市庁舎保管の遺骨につき団側の希望を陳べ了解を求める。

一二〇〇　団員一同、日本に向い終戦記念日の遙拝を行う。

第八日　8月16日（火）

一〇四五　ベシオ島戦争記念公園にて慰霊祭、スミス総督夫妻はじめ政庁議員、市長以下官民多数の参拝焼香をいただいた。終って来賓に対し御礼の野外パーティーを行った。慰霊祭はナウルの要領と同じく厳粛に行った。

一三〇〇　ベシオ発ホテルに引揚げた。夕刻団長、副団長、井田団員ベシオに赴き、遺骨箱に覆ひをし縛着し帰る。マキン島行は飛行機故障のため遺憾ながら不可能となる。

第九日　8月17日（水）

井田団員航空会社と単独交渉、単身マキンに亘り、午後タラワに帰る。団員は午前自由行動、午後民芸見物夕方明日のナア島行準備。

第十日　8月18日（木）

〇八一〇　バイリキ発、定員30名の発動機船でマキンに最短距離のナア島に到り慰霊祭を行う。追悼の詞、供物、供花、焼香、服装他島と同じ。往路の小艇で日没時ホテル前の海岸着。

第十一日　8月19日（金）

昼食を携行し最後のベシオ行を行う。自由行動。大部分の団員は午後一時半ベシオ発。ホテルに帰る。夕食時桜井、津久井両団員の誕生祝あとホテルで民芸観賞。

第十二日　8月20日（土）

タラワ出発時刻予定よりおくれ

一五〇〇　タラワ空港発三一九便

一六二〇　ナウル空港着小憩の後ナウル発一九五〇グアム空港着。リーフホテルに投宿。

第十三日　8月21日（日）

午前自由行動。一五二〇グアム発日航九四二便、一七五五羽田空港着。

団員全員無事故で本行動を完了した

団員名簿〔五十音順〕　団長（本会会長）浮田信家・副団長嶋田正彦・事務局長（本会副会長）佐藤宗丕・団員（ギルバート班）・安藤サヨ・伊藤博美・井田直忠・浮田桜代・（18頁に続く）

タラワ島に於ける戦歿者の遺骨について

副団長　嶋田正彦

会長を初め、我々一部は、昨秋タラワを訪問した慰霊団参加者から、タラワ島には、日本兵及び米兵のものと思しい遺骨があることを聞いており、その取扱いが、今回の慰霊団に課せられた大きな宿題であると考えていた。

準　備

従って現地到着までに皆とも内々に話し合い、特にタラワ到着の13日夕刻には全員で協議したがその遺骨の情報不充分のため結論は出せなかった。然し現地で良く調査した後の処理は幹部一任に落ちついた。

尚この時点で、検討された遺骨処理の方法には次の5案があげられた。

第1遺骨を日本に持ち帰る。

第2現地に埋葬する。

第3処置を次回に譲り、今回はこのまま帰る。

第4仮安置し保管を現地政府に依頼。

第5現地の人々も加えて、かつての海軍式に水葬にする。

調　査

翌14日朝ベシオ島に上陸すると、先ず遺骨が格納されていると聞いたベシオ政庁を訪ね、政庁の現地人最高責任者 Bwebweretiti 氏に会って事情を聞くと共に、裏の倉庫を開けてもらって、遺骨と対面した。彼の説明によると、これらの遺骨が収集された経過は次の通りである。

(1) 戦後4年経過以降、土木又は建築の各地域工事現場から発見された遺骨を島民が警察に届けたもの又は直接政庁に届けたものが、次第に集積されて現在に至った。

(2) これらの遺骨を、日本兵又は米兵のものと区別したのは、骨の大きさから判断したもので、外には何の根拠もない。

(3) 彼の説明によると、島民の遺骨は含まれていない。その理由は最近は、島民の多くはクリスチャンで、死後は共同墓地に埋葬される。昔は死者は、各自の家の近くに埋葬されたが、その墓は夫々の家庭で管理されていて、その所在は明らかである。倉庫内の遺骨はそれ以外の場所で発見されたものであるから、日本兵又は米兵のものに違いないとの事であった。しかし、これには充分な説得力はなく、島民の遺骨が混入している可能性も充分に考えられる。

(4) この遺骨は、上記のような次第で現在はベシオ政庁が管理しており、決して現住民の所有物ではない。

遺骨の現状

倉庫内の遺骨は、昨年の訪問者の報告によると、四つの大きな南京袋に入っていた由であるが、今回の保管状況は、その当時より悪く、二ツ（或は三ツ？）の南京袋に、夫々半分位と、あとは半袋分位が床上に散乱している有様で、日本兵又は米兵の区別は全くつき兼ねた。

我々は直ちに案内者の了解を得て、丈夫な木箱に遺骨のすべてを移し変え、倉庫の前に、臨時の祭壇を設けて、花を飾り、酒を供えて、会長を先頭に、次々に焼香をし、丁重に死者の霊を慰めた後、倉庫内にあった大きな空箱の上に安置して帰った。

オーストラリヤ政庁え依頼

以上の如く、遺骨の発見状況が明らかになり、その管理者がベシオ政庁であることが判明し、然も、その中のどれが日本人の遺骨か区別の出来ないことが分ったので、その遺骨の取扱いについては自ら結論が出たと考えた。

そこで翌15日会長・副会長のお伴をして、交通公社の西田氏と共に、オーストラリヤ政庁ジョン、スミス総督に挨拶に伺った際、この遺骨について、総督に成る可く、速かに埋葬なりその他政庁のしきたりに従って、丁重に葬っていただきたい又その結果を日本の厚生省と浮田会長の許に連絡してほしいとお願いをし、その快諾を得た。

（12頁に続く）

ベシオ島の遺骨収納（52・8・14）

ジョン・スミス総督閣下からの連絡

浮田信家殿　19・10・5

本年八月あなたが当地を訪問された折、私の配慮を促して下さった事柄についてですが、去る9月23日(金)に、タラワ島の戦争で、亡くなった兵士の遺骨の埋葬に立ち会いました。

この埋葬式は、ベシオ島の旧日本神社のあった場所でバハイ教の指導者主催の下に行われました。ここに地方新聞アトール、パイオニアを同封します。

今夏あなたにお目にかかれたのは非常な喜びでした。あなたとあなたの御家族及びマーシャル方面遺族会の方々へ心から御挨拶申し上げます　敬具

ジョン・スミス

ナウル・ギルバート現地慰霊団に参加して

静岡県　伊藤博美

遺族なら誰も一度は肉親のなくなった場所へ行って見たいと思います。私も常々一度はギルバートへ行って見たいと思っていました。

私の父は、横須賀海軍特別陸戦隊に所属していました。父と私は一度だけ横須賀で対面しただけです。戦地へ立つというので母と二人で面会したのが最初で最後でした。私が生後四ケ月の時と聞いています。勿論覚えていません。写真を見、人から聞くだけの面影です。父が家を立つ時もう二度と帰れないと覚悟をしていた様です。支那事変の上陸作戦に参加した事がありますので、その時の苦戦から自分が戦地へ行くことはどの様な運命になるのか悟っていたものと思います。

戦地からの手紙には、タラワ島は小さな島で南十字星がきれいだと書いてきたそうです。そんな島を一度見てみたい。帰れなかった父へは、こちらから行ってやりたい、そして今の様子を話してやりたい、そう思っていました。しかし、ギルバート諸島への渡航は、日時と費用がかかることを聞いていましたので今まではあてのない望みでした。そして今回行くことができるとわかっても、私を育ててくれた母も祖父母も他界し、妻と二人の子供を残して二週間ちかく海外への旅行には決心がいりました。幸い妻の実家の協力と勤め先の理解をいただき行くことができ、行けなかった人のことを思うと幸運だったと感謝しています。

今回マキン島へは都合で行くことができなかったのは残念でしたが、タラワには父がいましたので私の望みの何分の一かは果すことができたと思っています。タラワの空港に着いた時にはついにお父さんタラワへ来ましたよと言うことができました。それが言えたことが今回の旅行の全てのような気がします。マキン島へ行けなかったことは残念としかいいようがありません。

勤めの身なので、二週間も休む事は度々は出来ませんが、いつの日か、必ずマキン島を訪れて、今まで出来なかった父への孝行を遂げることを楽しみにしたいと思います。

二か月たった今もタラワでは四季の変りはほとんどない暑い日をおくっているのではないかと思いながら、島民の今後はどうなるのか、今の生活状態でいいのか、今の日本の方が生活しにくいのではないか、等と時々考えながら、八月九日から二十一日の十三日間を思い起しています。

群馬県　井田直忠

昭和52年8月16日タラワの慰霊祭が無事終了した日の夕刻、マキン行は無残にも中止となった。

この中止の原因は、定期便の故障とのことであるが、理解に苦しむことも多い。出発日直前の通知でも、マキン一泊旅行を可能としている。しかし、ここまで来ての説明では、宿泊施設はあるが、飲食機能は皆無とのこと。マキン行を目的にした希望者が愚痴るのもやむを得ないことである。

旅行業者の事前調査で、なぜこのこと位判らなかったのであろうか。

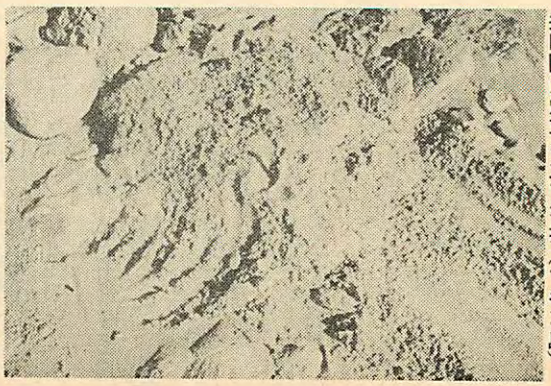
私はマキン行きだけを目的として、母の貯金までも借りて、参加したわけであり、この一瞬、目の前が真暗になってしまった。夕食時固型物は、全く咽喉を通らず、ただビールをあおるばかりであった。そのうちムラムラと単独行の野心が燃え上りライスを翌日の弁当にと思い部屋にもち帰った。

マキン単身行き決行につき、まず第一に気になったのは、添乗員の話から身の保障のないことである。それ故私に万一のことがあった時息子は私と同じような境遇におかれるのだろうか。また、飛行機の故障が多いということで、予定日に帰れなかった場合、いつ日本に帰れるのだろうか。仕事のこと、家族のこと等々が、走馬灯のようにかけめぐった。当時の父もこの南海の孤島で毎日同じような郷愁にかられていたのではないかと思った。

しかし、ここまで来てマキンに行かずに帰ることは、今回の慰霊旅行の意味がなく、また、マキンの話を首を長くして待っている老母になんと説明したらよいだろうか。

幸い生命保険は十二分にかけてある。後は決行だけと決心し、マキン行きの準備をした。再びベッドにもぐり、英会話の復習をしたり、帰りの飛行機便が、故障の場合のチャーター船のことを考えているうち夜があけた。

翌朝6時前に団長室を訪問した。一応の許可を得るためであったが、団長から「私の立場上マキン行きを良いと



井田団員煙草を立て礼拝（マキン島）

はいえない。しかし、私があなたの立場なら、同じことをしたであろう」と言うご返事をいただき、勇躍ホテルを飛び出した。

通りかかったトラックに手をあげたところ、すぐに止まり、運転手の、真黒い顔に、白い歯が光った。この労務者運搬用ダンプカーの助手席にわり込み空港近くまで行った。降ろされた所から約半マイルの道のりを滑走路の上を歩いていた。次に通りかかったのがマキン行きのパイロットを乗せた小型トラックであった。この時私はタラワからマキン行きの定期航空便の出発時間さえ知らなかったため、オーストラリア人パイロットの今日の日程を知る由もなかった。彼に「なんで今頃空港を歩いているのか」と聞かれた時

「私の父は日本海軍の兵士であったこと、そしてマキンで戦死したので慰霊に行きたいこと」をタドタドしい英語で答えた。

2～3分で空港事務所についたので受付けにかけ込み、マキン行きの出発時間を尋ねた。しかしその時の応待者は早出の事務補助員らしく、英語は全くわからないと言う。この時、例のパイロット〝ウィルキンソン氏〟が現われ、私の名前と前夜の宿泊ホテルを尋ねてくれた。勿論タラワのホテルはオシンタイだけであるが。

私は今朝のマキン行き便には空席のあることを聞いていたし、帰りの便には空席のないことも知らされていた。

このため無理とは思ったが、一日で往復の能否を尋ねOKの回答を得た。

当初、安全性を見てトンボ帰りを申し出たわけであるが、これが可能となると何か残念な気がした。とにかくマキンに行き、野宿して二日後の飛行便を利用するか、今日中に船をチャーターしておこうかと思っていた私には何かあっけなかった。

定刻〇七三〇15人乗りのこの飛行機は、旅客2名を乗せてかろやかに、タラワ空港を飛び立ち、美しいタラワの北島を通り過ぎていった。マキンへの行程約50分の途中いつか遠い昔の想い出がよみがえっていた。

◎父が横須賀から出港するらしいとのこと、母に手をひかれて会いにいった時、父は既に出港した後であった事

◎昭和18年11月マキン、タラワ玉砕のラジオ放送を聞き、母は泣きながら、手打ちうどんを作っていた事。

◎小学生時代、父がジャングルの中で生きている夢を何度も見た事（環礁の実態は全く知らなかった）

「マキンが見えて来た」と隣りのキャプテンに言われたとき、ハット思って前方を見たが、私の目には何も映らなかった。見えなかったのが当然で、30数年来の念願がやっと果たされる感傷で、私の瞳は涙が一杯であった。

機長の好意でブタリタリ島を二回旋回し空港に着陸した。ここは同島の東岸らしく昭和17年の金光兵曹長の話が思い出された。

空港から2～3分で海岸に出た。正直いって、おそらく無理とは思ったが貝を探すふりをして、遺骨を探した。誰のでもいい、たとえ米人のでもよい。だが古戦場から相当離れたこの地では、それらしいものは何も無かった。

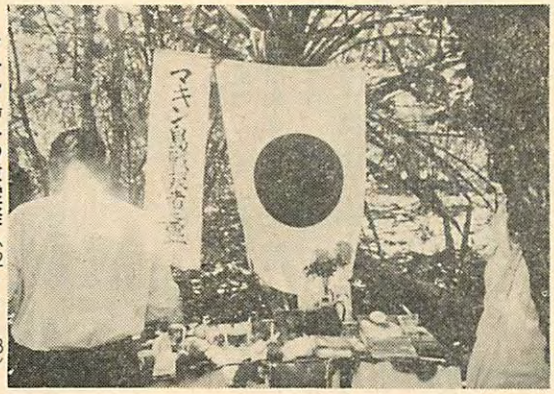
諦めて、家族全員の写真を砂に埋め、お線香代りに、父の好きだったタバコを立てた。しかし現地の親切な巡査や好奇心の強い島民のため、一人感傷に浸れなかったのは残念であった。

私のお世話になったタラワ―マキン便は、マキンからの帰途マラケイ島に寄る約半日の行程である。当初マキン滞在は約20分とのことであったが、乗客が混雑していたため約一時間滞在した。たった一時間であってもこの島を踏めたことは誠に幸せであった。

無事帰国して、今回の慰霊旅行を反省するとき、このマキン行きの成功は機長ウィルキンソンの好意によるものであり一生忘れられない恩人として思い出している。然しそのかげには、父の導きがあったからこそと信じている。

またマキン環礁ブタリタリ島の戦場に行けなかった無念さがこみあげてくるのもやむを得ないところである。願わくば私の生ある中に、父の最後の地であったであろう無線室用トーチカに入って見たいと思う今日此頃である。

最後に今回の旅行を企画され、且つその成功に最善の努力をされた浮田団長以下幹部の方々に深く感謝申し上げる次第である。



マキン島への慰霊祭（52・8・18）

一滴の水

福岡県　太田　清

日常海軍々人は船舶に乗って海上生活をするので、水は大切なものであり、尊い生命を守る飲料水である。

玉砕となったタラワ島の激戦中、一滴の水を求めて、水が飲みたいと天を仰いで叫びつつ玉砕となった四千五百名。私は此の度のタラワ島現地慰霊祭参加に対し、ただ懸命に

「水だ。タラワ島には水を持って行かなくてはならない」

と心に念じて、故郷の深山より湧き出る清水を早朝登山して水筒に入れ、日本から数千キロ離れた、赤道直下のタラワ島まで持って参りました。

昭和52年8月16日タラワ島戦歿者慰霊祭に、この清水をお供えしました。「さァ飲んで下さい、戦友よ」慰霊祭の祭壇の前に立ち手を合すと、今までおさえていた感激と三十四年目に再会した戦友の霊に、涙が流れて止まらない。私は参列してくれた島民の中に這入って涙を拭いました。

やがて祭典も終った。早速水筒の水を灼きつくタラワ島の白い砂に撒布する。涙と水がタラワ島に深く滲る。

戦友よ。何時までも何時までも安らかにおやすみ下さい。又逢える日まで

（筆者はタラワ島復員者）

タラワ島に眠る弟を訪ねて

神奈川県　嶋田正彦

私は終戦直後、生きている間に一度は弟の玉砕したタラワ島を訪ねようと心に誓いました。然し遠く離れた南海の孤島故、訪ねるすべもなく、いたずらに三十有余年の年月が経過してしまいました。

然るに今回計らずもマーシャル方面遺族会でタラワ、マキン島現地慰霊団参加の募集があると聞き勇躍申し込んだ次第です。

無事飛行機がタラワ島空港に着いて第一歩を踏んだ時「弟よ、お待ち遠さま、やっとおまえの古戦場を見に来たよ」と心の中で弟に呼び掛けました。それから六日間ゆっくりタラワに滞在し、激戦地ベシオ島にも数回に渡って心ゆく迄戦跡を見て廻り、もう何も思い残すことはありません。その上盛大な現地慰霊祭まで挙行して戴けたので、弟もこの平和な島で純朴な民に見守られながら、安らかに永眠することでしょう。私は念願を果した満足感をかみしめながら、再び訪ねることはないであろうタラワ島に別れを告げて帰国致しました。

他方マキン島の御遺族が色々と不運な事情によって直接島を訪問出来なかったのは、私達に引きくらべ誠にお気の毒な事でした。

尚今回の慰霊団には御高令にも拘らず自ら団長として卒先指揮に当られた会長の御労苦に深く感謝すると共に、半生を会の運営に捧げられている高潔な御人格に強い感銘を受けました。

又、同室の栄を得ました佐藤副会長には、日常会話の中に色々人生勉強させて戴く等、大変お世話になりました。

最後に今回の旅行中商売気を離れて献身的な努力をされた交通公社の西田氏に厚くお礼申し上げます。

慰霊団に参加して(1)

浮田　桜代

○三十年(みそとせ)を経し白砂は
　変りなく
　みたまいづくに
　ねむり給へる

千葉県　津久井艶子

この度は、亡夫の最後の島を訪ねることが出来ましたのを心から感謝致しております。あの美しい島の姿を想い、採集しました貝がら、砂などを家族一同と手にしながら、話がつきません。写真が出来上ったなら、更に花が咲くことでございましょう。本当に本当に有難うございました。

青森県　塚原ハナ

小春日和の良いお天気が続きます。タラワ島から帰りましてから、もう二カ月も過ぎました。その節は会長様始め皆様方にさんざんお世話になり乍ら御礼も申し上げず大変失礼して居ります。悪しからずお赦し下さいませ。

帰宅後歯痛に悩まされ、それに春から疲れて居りましたので、何をする気力もなくなって了いました。

只今治療中ですが11月には是非上京して皆様にお礼を申し上げ、又8ミリも見せて頂きたいと楽しみに致しております。

今迄は、一人も主人と一緒であったという方もなく、どんな処で戦死したのか皆目判りませんでした。でもマーシャル方面遺族会に入会させて頂きましてから、少しづつ様子が判りまして、何時かはギルバートに行きたいものと考えておりました。

この度永年の念願が叶いました事は嬉しい事でございました。これも本遺族会のお蔭と感謝致しております。

タラワ島に着いたのが奇しくもお盆の8月13日私達の方ではご馳走を作ってお墓参りに行く日でした。現地では盛大な慰霊祭を施行して下さいまして有難うございました。こんな小さな島に四千五百人もの人が玉砕とは、全島にお骨が埋っているようで、なんとも足のすくむ思いでした。

激戦のあった砂丘で、その時の様子を聞き溢れる涙をどうすることも出来ませんでした。又御一緒の方が浜辺にお線香を立てているのを見ては又涙の流れるのをどうすることも出来ませんでした。

玉砕と申しますと、美しく奇麗に聞えますが援軍もなく、敵の激烈な砲弾に晒(さら)され、最後は突撃か自爆か、この度は戦争の悲惨さを泌み泌みと感じさせられました。

金鵄勲章も色褪(あ)せて、悲しみも、苦しみも過去のものと思って居りましたが、旅行から帰りましてからは、旅行の写真を見ては涙を流し、手紙を書こうと思っては涙が流れ、恐るべき戦闘の記録タラワを読んでは涙を流し、環

礁を読んでは涙を流し、すっかり泣き虫になりました。

環礁に載せるような文は書けませんが、せめて会長様に御礼を申し上げたいと思いまして筆を執りました。遅ればせながら厚く御礼申し上げます。

東京都　長尾静子

「タラワ島で玉砕」の公報を受けて、三十三年が過ぎました。

両親にとっては唯一人の男の子、私にとっては大切な大切な兄でした。その兄が軍医学校を卒業して、一年もたたぬうちに戦死してしまうとは、夢にも思っていませんでした。

タラワ島という名を知らされて以来、どんな島なのか一度でいいからこの目で見たい、御霊安らかに眠れるような島であって欲しいと念じておりました。

漸く機会を得て訪れることができたタラワ島は、タラワ環礁の中の一つの島で、ベシオ島というそうですが、海抜一メートルもない位で、真夏の太陽がギラギラと照りつけ、首を左右に回せば外海と内海が見えてしまうような平らで奥行のない小さな島でした。

三十数年も経た今でも、敵の弾丸に撃ち砕かれて崩れたトーチカや、高射砲、戦車の残骸が赤茶色になってあちこちに残っており、戦闘の凄まじさが忍ばれ胸が痛みました。

内地との連絡も断たれ、遠い南の孤島に置き去りにされた四千数百人の方々の、切なかった気持ちを思い、流れる涙を止めることができませんでした。工事のために土を掘れば、それ程深くない所から出てくる遺骨、自分の立っている下にも――と思うと、やりきれない気がしました。

掘り出された遺骨は、放置せずどうぞ丁重に葬ってあげてと、叫びたい気持ちで一杯です。

慰霊祭のあと、兄の最期の場所と思われる近くの砂浜へ行き、内地から持参したお供物を飾り、お線香をたて、自分の爪もそっと砂の中に埋めて、静かにお別れをしてきました。

帰りの飛行機から見下すと、タラワ環礁にはっきりと美しい虹がかかり、英霊が別れを惜しんで私達を見送ってくれているようでした。

肉親を失った悲しみは、一生消えることはありません。多くの人達にこんな大きな悲しみを与える戦争が、今後絶対におきないよう、心から祈っております。

最後に、浮田さまはじめ皆様のお骨折りによって、現地での慰霊祭ができましたことを厚く御礼申し上げます。

慰霊団に参加して(2)　桜代

○流燈の
水光らせて
宵惜しむ

義学院玉岩明倫居士にまいる

北海道　藤澤　昭（旧姓下里）

八月十三日、タラワ島オシンタイホテルでの第一夜、十一号室に真っ白いトカゲが一匹机の上で私と同室の桜井氏とをむかえて呉れた――

「トントン、トントン」ノックの音「ハイ」と飛び起きドアを開ける。誰もいない。空耳だったかと又ベットに横になる。どの位寝たか「トントン、トントン」又ノックの音で目をさます。「ハイ」と再びドアを開ける。誰もいない。変だなと思い外に出ると外は椰子の葉をゆるがす風と雨、スコールの真最中、その時ドアが風で閉まりロックされ閉めだされた。私はしばしその場に立ちつくしていた。風がドアをたたいたのかも知れないがその後のいろいろな事から私はあなたが最初のノックで会いに来、二度目のノックで帰って行ったのだと今では信じている。

「お前は男だ、而も日本男子だ。名前の如くあかるい気持で強く生きて行け、父は必らずお前の成人するのを遠く戦地で見守り激励して居る。お前の体内には父の血が通っているから軍人として立派な素質を有して居るに違いない。良く勉強して必らず軍人になりなさい…」当時小学生だった私に遺言を残して去ったあなた！その遺言に添う様私は私の武士道にのっとり「自から反して直くむば千万人と雖ども我行かむ」の座石銘のもと、人はごまかせても自分はごまかす事は出来ない自分に忠実に……と強く正しく生きて来た積りです。オフクロが夢の中でオ宮でオミクジを引いたところ〃自刄せり〃と、その二日後に戦死の公報が入りました。多分あなたは戦闘の末傷つき武士として自から命を断ったのだと思います。つらかったでしょう、家族にも会いたかったでしょう。しかしそれらをかくし武人として散っていったのだと信じます。

オフクロが再婚したが為自分も下里姓を名乗りその業たるタイル業界に入り二十有余年真剣に生きて来ました。やっと念願がかないタラワ墓参が出来る事がきまり、裸であなたに会いたいと自分の責に於て他の人に迷惑もかけず会社を閉鎖…し、旧姓藤澤　昭に戻りあなたの長男として会いに参りました。

……◇……

十四日朝、バイリキ港をフェリーが出航する。初めてみるベシオ島、そのベシオ島がだんだん近くなる。椰子の葉かげ砲台が見える、トーチカが見える。それが時々見えなくなる、私のうちからこみあげて来るもので島がかすむ。オヤジ会いに来たぜオヤジ！　一諸に酒をくみかわす為にはるばるやって来たぜ……かつてジョンウェイン主

演の〝硫黄島の砂〟でタラワ攻防戦を実写で見て以来、タラワに行きたい、タラワの土を自分の足で踏みたい、と願い続けて来ました。その願いが、夢が今ここに実現しょうとしているのだ。

フェリーはベシオ島についた。第一歩、ベシオ島の土を踏む、オヤジ！とうとうやって来たぜ！胸がしめつけられとっくの昔に失くなったと思った涙が……汗をふくふりをしながら手拭でまぶたを拭く、何も書きようがないどの様に表現しても嘘になる様な気がする、ただ私の心の中に生きているあなたに向かってオヤジと呼びかけるだけなのだから。これはそこに立った者だけが知り得る気持だろう。オヤジ！日本から、故国から酒を持って来たぜ一諸に飲もう……な。

……◇……

帰国後タラワの霊砂をあなたの生家信州・藤沢村本陣の先祖の墓地に埋めました。そして菩提寺高遠の建福寺に位牌を納めて参りました。高遠役場にてあなたの謄本をとって気がつきましたが八月十八日があなたの誕生日でしたね、その時私はタラワに丁度滞在して居りましたがこれも何かの因縁かも知れませんね。その帰り杖突峠より八ケ岳方面をみた時暗雲の中に二条の虹がかかり丁度私を送って呉れているかの様でした。思えばタラワにて慰霊祭当日バイリキ港を出る時見事な半円の虹がベシオ島の砲台にかかっていました。これはあなた方が私共遺族を喜こんで迎えて呉れたのだと思います。タラワに来てよかった、本当によかった、と思ったのは私だけではなかったでしょう。

写真を焼き付けした所、四百枚以上の写真の中で先祖の墓の前に霊砂を埋めている一枚だけ一条の光が入り墓を照らしていました。先祖の皆様もあなたが帰って来た、よく帰って来たと喜こんで呉れた事だと思います。

白トカゲの出迎えから始まり、あなたのホテルへの訪問かノックの音、慰霊祭当日の出迎えの虹、そしてタラワを離れる時飛行機上より雲間に瞬時見た虹、信州で霊砂を納めた帰り見た虹、納霊砂の写真の中の一条のひかり、その上偶然あなたの誕生日にタラワに慰霊旅行中だった事等不思議な事々の重なり合いは一がいに偶然とのみ片ずけ切れないものが感じられます。ただ云い得る事は先祖もあなたも今回の私のタラワ行きを非常に喜こんで呉れたと信じられる事です。

ここに私の一つの人生の旅が終りました。この大宇宙の中に生を受けし命はいつか生涯を終って永遠に眠りにつき肉体は土に戻るでしょう。私も何時かあなたのそばに参ります。私の心の中には一つの事が終ったと云うむなしさが嬉しさとうらはらに残って居ります。今迄あなたと私を結んで呉れる、ただ一つの歌、それはあなたが教えて呉れた〝海のつはもの〟でした。今度の旅行でもう一つ増えましたね。タラワで古老がものうげに歌って呉れた歌は忘れる事が出来ません、きっと三十数年前にあなたも歌ったのだと思います。

アケテウレシ　タメイキニ
タノシタラウノ　オモイデヨ
ヤシノハカゲニ　トコナツノ
シャカボタラワ　オカノシタ
ツキノナギサニ　バラケード
タラワツヅク　オモイデヨ

私はこれから裸で第二の人生を踏み出します。私の生き様を見ていて下さい。見守っていて下さい。あなたは私の心の中にいつ迄も生き続ける事でしょう何時か再び相まみえん事を……

合　掌

東京都　星川　武

本年初頭はじめてマーシャル方面遺族会のことを知り、そして会の企画による現地慰霊団に参加させていただき感激一入でありました。

環礁を拝読するうち30余年前、南海の孤島で奮戦しそして尊い命を国に捧げられた幾多の同胞、戦友への思い出がこみ上げて来ます。

私は昭和17年10月普通科整備術練習生を卒業し海軍14航空航空隊附を拝命しました。これで愈々戦地勤務が出来ることに小踊りして喜んだ。

11月1日この隊は802海軍航空隊と改名され、同月横須賀出港前線に向った。雄大な太平洋の航海は実に男冥利につきた思いであった。

802空の任務や、そこがどんな戦略上の地点にあるのか若年兵の我々には知る由もなかったが、毎日夜明けと共に97式飛行艇を哨戒に飛ばせ、薄暮に帰ってくると明日えの出発準備、機械の点検、整備、燃料搭載と仕事も大張切りであった。然し飛行艇出発後は、水泳をやったり、椰子の実をとったりした。

18年に入りマキン島基地に度々派遣された。同島では二式大艇に爆弾、燃料を搭載したりした。椰子林に分散してあったドラム缶の燃料を、桟橋まで転がして燃料補給艇に転載したり、沖に繋留した大艇に給油もした。補給艇のポンプが故障したので、翌日の爆撃に備え、手動ポンプで一万六千ℓを補給した時は夜を徹した。

18年6月高等科整備術練習生入校のため、内地に帰ったばかりに今尚生存する我身をうらめしく思う事が、しばしばある。

慰霊団に参加して(3)　桜代

○タラワ島に　命さゝげし
　　つはものら
大砲錆びて
訪う人もなし

東京都　水野ハナ

今年も8月9日から13日間にわたりマーシャル方面遺族会の皆様と共に、ナウル、タラワ、マキン方面の現地墓参の出来ましたことは、感銘深いことでした。私は太平洋戦争で昭和19年2月、長男をクェゼリンで失い、20年3月には東京大空襲で主人が犠牲となりました。

我が身を思い戦死者の遺族の多くの心境は、誰も同じと考え、戦後は、英霊の墓参会には、つとめて参加し、英霊を慰め、ご冥福をお祈りしている次第でございます。沖縄は勿論、南方ではウェーキ島始めグァム、サイパン、セヴ、レイテ、ルソン島などの戦跡を巡拝しました。特に昭和50年夏、一般には許可されていないクェゼリン島にも、浮田会長の特別の御尽力で、上陸して息子の墓参が出来ましたことは、長年の夢を実現して、まさに感無量で、感謝に堪えない次第でございます。

さて今回は、ナウル、タラワでの慰霊祭を、現地の住民の方々を交えて、厳粛に、盛大に挙行することができました。又ナウルの夜は知名のジョン、ウイリーご夫妻を招いて、盛大な晩餐会を開催致しました。参会者一同、楽しい気分に浸り、ハーモニカを吹いたり、軍歌を合唱したり、踊りや島民の方々のダンスも始まって、まことに印象的なものとなり、相互の理解を深めるのに、充分でありました。タラワでは二回にわたり、楽しいパーティーが開催され、一同満足したので、英霊もさぞかし、喜んで下さったのではないかと、話し合いました。

只残念であったことは、飛行機の都合で、マキン島へは、行かれなかったことですが、その代りに、同島に最も近いナア島へ参ることになりました。片道三時間も船に乗って漸くその島に到着しました。島の周辺は珊瑚礁で囲まれ、上陸は困難でしたが、若い男性の方達が、水中に入って、私達老人や婦人の上陸に力添えしていただいたことは、有難いことでした。

ナア島では、嶋田さん達が、御苦労して、タラワ島から運ばれたトタン板で、祭壇を作り、日本から持参したまごころのこもったお供物を飾り、慰霊祭を挙行しました。

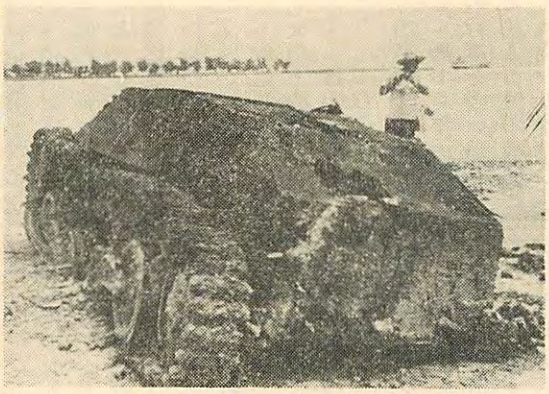
佐藤副会長の司会で、一同黙禱を捧げ、英霊に対し、遺族が呼び掛けを行い、浮田会長から追悼の言葉が述べられ、多大の感動を覚えました。その後で土岐さんの「阿字観」の尺八吹奏（テープ）が流され、英霊も充分に慰められて、永遠の眠りにつかれるように感ぜられました。一同持参したおにぎりを頂いたあと、帰途につき、有意義な一日を過すことの出来たことを喜び会いました。

今年の墓参旅行は、種々の艱難辛苦もありましたが、役員の皆様の周到なご配慮と、献身的なご尽力があり、又参加者一同、協力一致して行動しましたので、無事に大きな収獲を挙げて、目的を達することのできましたことは、同慶の至りに存じます。

千葉県　谷沢英子

8月9日から21日までの13日に亘る長い旅行に御一緒させていただき会長さんはじめ役員の皆様にはなみなみならぬお骨折本当にありがとうございました。羽田を出発する時は会長さんと佐藤さんしか存じない私は、一人ぼっちで心細く南十字星のあの会旗は絶体見失うまいと緊張の連続でしたが、日本を離れて一日一日と日が立つ中に今までお近づき出来なかった会員の皆様とも十年来の知己の様に椰子の水を廻し呑みする程親しくおつき合い出来ました事を何よりも嬉しく一生忘れられない思い出となることでしょう。長い間心にかけていた主人の戦死場所に、この足で歩き、この目で見て来たのでもう何も思い残すことはございません。

タラワは小さな珊瑚礁ではありますが青々とした椰子の木の茂る島そして美しい空に虹がかかる島、きれいな青磁色の海に囲まれて、そこに静かにねむる英霊に心から御冥福を祈りました。然し30余年経た今も激戦の跡生々しい砲台の様子や大きな弾痕のあるコンクリートの壕を見て、戦争はもう絶体にしてはいけないと泌み泌み思いました。又島民の淳朴さと優しさにも心を打たれました。なまじ文化の発達した国の人達が幸せとは申せません。美しい自然の中で人間らしくいつまでも、幸せに暮していただきたいと願ってやみません。スナップ写真も出来ましたのでアルバムに貼り私の宝物として大切にしたいと思います。つたない文ですが感じたままを書き連ねました



タラワ島海岸に遺された戦車

慰霊団に参加して(4)　桜代

○虹の輪に
環礁めぐる
盂蘭盆会

ナウルの想い出

神奈川県　江村源次

昭和18年4月15日新に編成された第67警備隊（ナウル）員山口勝三中尉を筆頭に四百余名東京丸に便乗、ナウル島に上陸し、砲台の建設、陣地の構築、訓練に昼夜兼行、島の警備に万全を期していた。

18年5月24日四群高角砲が略完成し、試射を実施、結果良好、敵空襲に備える。9月11日北昭丸が入港直前、敵の魚雷を受け、弾薬、糧食外満載の儘爆沈し切歯扼腕して惜しむ。生存者40名救助す。その後間もなく空襲が頻繁となり、9月18日は夜10時から翌朝迄二百数十機の空襲を受け、タラワは連続空襲を受けた由。敵はタラワ上陸を企図し、その前振れの作戦だったと思われた。11月25日タラワ柴崎司令官以下最後の突撃敢行の悲報を聞き、同島の教訓を学び、上陸部隊邀撃用陣地構築、糧食、弾薬の分散を計る。11月28日より減食、貯蔵食も主食六カ月、副食二カ月分となり、食糧自給自足も決定的となり、対空戦闘の合間を見て、南瓜作りに力を注ぎ始める。

12月9日には未明からナウルに艦載機の大空襲、続いて戦艦6隻、巡洋艦4隻、駆逐艦4隻で艦砲射撃一時間に及び、続いて二次空襲あり、曳光弾は我々の身近くまで飛来す。島内に二、三機、海上至近距離に一機撃墜。駆逐艦一隻ナウル水上砲により撃破し撃退す。友軍戦死一名の外被害は驚くほど軽微であった。

この大戦闘直前敵艦隊が水平線上に出現するや司令部から各部隊長至急参集すべしとの命下り、各部隊長は急拠司令部に参集し、上陸作戦の企図粉砕の打合せの後副田久幸司令から、これが皆さんと最後になるかもわかりません。各部隊最善を尽すよう訣別訓示があった。私もこの時は敵の上陸は避けられないと決心していた。

ナウル島はタラワ・マキンと違い、たとえ海岸えの上陸は成功しても、島内陸部には、道路を完全閉鎖すれば、道路以外進入は不可能であることは、米軍も承知していることで、短期間に完全占領は困難と見て輸送船団を伴わず上陸作戦は避けたものと見られ、一同一先ずホッとした。然し油断は禁物であり以後緊急築城作業を開始し、陣地の強化に努めた、

タラワ・マキンが玉砕するや、19年1月下旬から毎日のように戦闘機による急降下爆撃が繰返され、その都度砲台付近の南瓜畑を荒されるのには閉口したものである。

2月6日クェゼリンが玉砕しナウルへの補給益々困難となり5・6月中友軍の飛行機3機来島を最後に補給は杜絶した。

6月30日B25来襲、一機島内に撃墜、士気大いに揚るも、戦死者2名出したのは甚だ遺憾であった。かくして1年余り南瓜を主食に、椰子汁を採取し対空戦闘を繰返し、戦っているうち8月15日終戦となり、16日無条件降伏を全員に伝達し、一同虚脱状態に陥る。

終戦の詔勅並びに陸海軍軍人に賜った詔勅が煥発され、軽挙妄動を慎しむよう厳達があった。終戦処理は命により大砲・機銃は発火装置を外し、兵器と共に指定場所に集め濠軍の接収を待つ。

20年9月16日濠軍船に乗船ブーゲンビル島トロキナに向い、19日下船、死の行軍を強いられる。トロキナ収容所に約1カ月の後、再び移動、無人島ピース島マサマサ島に分散移駐せしめられた。悪性のマラリア猖獗を極め、死亡者続出し、全員これに罹病し埋葬の作業員すら事欠く、悲惨な状態に陥る。ナウル部隊は当初の6割に減少した。昭和21年1月2月に亘り待望の復員船が入港し故国へ生還復員した。

以上のような激戦苦闘のうち私は武運に恵まれ微傷だに負わず生還し、復員後も、幸運にも病むこともなく、今日まで生き永らえ、日本の繁栄を見るにつけ、戦歿者並びに御遺族には、誠に御気の毒な次第で御同情に堪えません。

元気の間に現地訪問、慰霊の機会を窮っておりましたところマーシャル方面遺族会浮田会長様のお蔭で今日実現を見て、感謝申し上げております。ナウル飛行場に降りて、あたりを見回した時本当に夢のようでした。終戦後32年も経た今日無理もないことだと思います。

外見上最も変ったことは、各所に立派な国営諸施設が存在することや島民婦女子の服装並びに住宅であり又島中心部の見渡す限り燐鉱石採掘の跡でありました。婦女子の腰蓑姿は一人も見えなかったし、木の葉作りの住宅も一軒も見当らず、それ相応の服装をし立派な木造の家に住んでいたからです。

終戦前と変らぬところは燐鉱処理工場の建物及び積出桟橋、ブアダ湖そして押し寄せる大洋の波音位のもので、その他は終戦前の面影は殆んど無いといってよいと思う。然し戦跡見学で1・2・7糎高角砲2基、俯角2・3度の残骸を見た時は壮年当時張切った砲台長の頃を想起し、何ともいわれぬ懐しさを覚え感激無量でありました。

ジョン・ウィリーさんの説明によれば、また最近海鳥が採掘跡え飛来するようになったとのことでした。

念願の現地慰霊祭を厳かに盛大に執行されて、戦歿者の御冥福をお祈りし、感謝の涙が急に流れたのでした。これで重荷を卸した感じで誠にサッパリした心境です。何時往生遂げても、この世に心残りはないと思っております。団長始め団員の皆様有難うございました。

（元67警備隊分隊長・高角砲台長）

慰霊団に参加して(5)　桜代

ナウルにて

○星月夜
丈高き草に
虫しぐれ

長崎県　香月正紀（副団長）

私はこの度マーシャル方面遺族会のナウル、マキン、タラワ慰霊団に参加させて頂きましたが、この機会を得られた事を、本当に心から感謝致します。

私は昭和16年9月から、17年11月迄マーシャル群島マロエラップ島に居て、同島で開戦、一旦帰国後再び昭和18年6月26日から、20年10月3日ソロモン群島に移動するまでの二年余を「ナウル」島で過しました。

この度昭和52年8月9日羽田を出発・グアム経由、8月11日ナウル島に着いたが、32年振りの、夢に見たかっての戦地を現実に踏みしめて感慨無量でした。連日の空襲と、19年12月9日の艦砲射撃、飢餓と病気との2年余が走馬燈のように脳裡を走る。

翌12日朝、ナウル飛行場の近くの、外人墓地の一角で、戦歿戦友の霊を弔う。何時の日か、この地で慰霊の機会のあることを期していたが、漸くその機会を得たのである。戦後30有余年、敗戦後の混乱から立ち上り、今日の平和と繁栄をもたらした事を、英霊に深く感謝し、合掌した。

島には無数に残るトーチカの外に、高角砲二基、水上砲一基が残っていた。高角砲は旧第四高角砲台のもので、砲台長江村氏、今成氏の感激これに勝るものはなかった。水上砲一基は島の北端の西部にあり、菅野隊長指揮下のものであることをジョン、ウイリー氏に教えて貰った。又宿舎メンネンホテルの近くに同行、中島氏が居た戦跡があった。同日夕方ブァダ湖畔にゆく。一中隊跡、主計隊跡を左に見て湖を半周し、湖の南東隅で、山手に入る。約30米は拓かれていたが、その奥は樹海とつたかづらで、踏み込む事が困難である。これをくぐり、或は踏みこえて、薄暗い中を奥に進む。一瞬ドラム缶の列を見つけた。これは戦時地下手術室の入口である。それにつながる地下病室の入口も見られ、本当に感激の一時であった。時間のあまりがなく、まわりを歩き、見まわる事が出来なかったのは残念だった。浮田会長もその近くで土にうもれた機関科の発電機を見つけられ私達ナウル組の進入を待たれたが、これも時間の不足で、意にまかせなかった。しかしこの一時が、私のこの度の行程の最高の印象でした。

翌13日、ウィリー氏の好意でナウル国立病院を訪れ、最近の島の衛生状況を知ることができた。

私達ナウル組四名は同日午後離陸。グアム島え、翌14日羽田に帰り着いた。以上簡単ですが御礼を含めて御報告といたします。

（筆者は元横二特軍医長）

群馬県　土岐　正

今回マーシャル方面遺族会一行に加わって、32年振りにナウル島を訪ねました。昭和52年8月9日朝羽田を出発、グアム経由で行き11日の朝ナウル島に着きました。

ナウル班は元横二特軍医長の香月正紀さんと、元第四高角砲台長の江村源次さんと今成秀忠さんと私の四名でした。

私は昭和18年6月4日に大型水上機で横浜を出発し、サイパンを通り、トラック島に行き更に中型攻撃機に乗って、クェゼリン、ルオットを経由してナウルに6月20日着任しました。

当時は立派な病院や宿舎があり、色とりどりのハイビスカスやプルメリヤが咲き乱れて、南国の楽園を思わせる風景でしたが、同年11月、タラワ、マキンが玉砕してから間もなく米軍の艦砲射撃と空襲により地上の建物は殆ど破壊されてしまいました。

島民の家は殆ど椰子の木で造られておりましたが、今回の訪問で驚いたことには、ナウルでは椰子の木で造った家は一軒も見当らず、ペンキを塗った小綺麗な家が、椰木林の中にあり、その庭先には、自家用車とオートバイがあり、若い娘たちが、それを乗り廻していることでした。

現在のナウル島は、世界で二番目に小さな独立国で、一人当り国民所得は世界一と言はれております。総て島から採れる燐鉱石のお蔭です。

戦時中は裸足で腰蓑かパンツ一張の痩せていた島民が今では男も女もぶくぶく肥っていました。

私のいた頃は、アメーバ赤痢とデング熱に悩まされていましたが、現在は殆どなくなり、それに代って肥満による心臓病が多くなったとのことです。病院を訪問しましたが、相憎く土曜で医師は一人もおりませんでした。折角行きましたので受付の女の子に案内して貰って病室や手術室やレントゲン室を見て来ました。かなり完備しておりました。

戦争中の名残りをしているものも所々ありました。海岸付近にはトーチカが幾つも残っておりました。中には完全なものもあり、半ば壊れたものもありました。

山には高角砲台の高角砲が二基錆びて残っていました。水上砲も残っているとのことでしたが、時間がなくて見てくることが出来ませんでした。

元軍医だった香月さんと私は戦時中約二年間使用していた地下手術室が現

在あるかどうかが最大の関心事でした。記憶も大部薄れておりましたが、往時を思い出しながらブァダ湖（山中湖）の周辺を探がしました。熱帯樹が生ひ茂っていたので、私は半ばあきらめてバスの方へ帰りかけた時、香月さんは執念に燃えてジャングルの中に分け入り、間もなく「土岐さん、見付っかったぞ」と頓狂な声を張り上げたので、びっくりして声のする方に駈け込んで行きました。其処には目印だったドラム缶が十本程32年前と同じ様に残っておりました。防空壕の入口は土砂で塞っておりましたので中の様子は見極めることは出来ませんでしたが、当時を思い浮べ感無量でした。

戦時中時々助け合った島民の医師バニケ氏が新生ナウル国の厚生大臣兼副大統領に就任しておるのを知って、是非会いたいと思って、お土産物を買って行ったのですが、今年の一月に腎臓病で亡くなったのを、現地で知り香月さんとガッカリした次第です。然し遇然にバニケさんの娘が私達のいたホテルに来たので、お土産の日本人形を差し上げました。

艦砲射撃を受ける前に、病院で雑用、主として使用したガーゼや繃帯洗いや掃除に使っていた八名の島民の娘（今ではおばァさんになっていると思はれますが―）に会いたいと思っていましたが、とうとう一人にも会うことが出来ず本当に残念でした。

今回の旅行で嬉しかった一つに、同行の中にタラワで戦死した長尾芳樹軍医大尉の妹さんが居たことです。長尾大尉は軍医学校時代に私の受持った第三分隊の学生で、金沢医大を卒業した優秀な、しかも温厚な方でした。その妹さんに偶然ナウル国営の飛行機の中で知り合い、長尾大尉の在りし日を偲び色々話し合うことが出来ました。

最後になりましたが、ナウル島にて戦死、戦病死された五百数十名の海軍々人や軍属方の慰霊祭が滑走路わきの基地で、タラワ、マキンの戦歿者の遺族の方々列席の下に厳かに行われました。私は持参しました尺八で、秘曲、阿字観を吹奏しました。

マーシャル方面遺族会会長で今回の団長元海軍大佐浮田信家氏を始め、副団長嶋田正彦氏、世話役の佐藤宗丕氏、その他同行の皆々様に一方ならぬ御世話になりましたことを、心から感謝し、併せて皆々様の御多幸を祈って終ります。（筆者は六七警軍医長）

神奈川県　安藤サヨ

緊張しどうしのナウル島での慰霊祭も無事終ってメンネンホテルへ帰りました。午前中の忙しさにひきかえ、窓の真下に親豚に連れられてノソノソ子豚がいたづらしながらついて歩く様子をみてホッとのんびりしました。

次がいよいよタラワです。またしても緊張がつづきましょう。タラワの空港はボナペやトラック空港よりももっと鄙びた雰囲気。ホテルまではダットサンで運ばれることになりました。両側に椰子を見ながら二分も走ったと思う頃矢沢さんが海岸に向い「来ましたヨ。皆さんと一緒に来ました。来ましたヨ」と御主人に呼びかけた声。隣にいた私は胸が一ぱいになり、涙がほほをぬらしました。長い年月の願いが叶い、今、この島での妻の声、御主人もさぞかしと想われました。慰霊祭の行われた8月16日は、島に綺麗な虹がかかり津久井さんは英霊が天から降りて来る橋だと、自動車の中からしみじみと、その虹を見ておられました。

また8月17日だと思いました。谷沢さんと塚原さんが流し灯籠をつくり心をこめて、池のようなタラワ礁湖に流しました。間もなくゆらゆらと静かに流れ去りゆく灯籠を見て、どうぞ安らかにお眠り下さいと、お祈りするばかりでした。

この度の墓参は時間がありましたので、心をうたれることが多ございました。

嬉しかったことは、マーシャル方面遺族会の記章の中に輝く南十字星を、しかも、限りなく晴れた夜空の中に、高度一万米の機上からはっきり観測できたことでした。グァム島第一夜に会長から、刷物で詳しく説明をきき又この方面を何回となく、飛んでいる操縦室の航空士さんから「あれが南十字星ときいて私として永い間憧れた望みの叶えられたひとときでした。

（3頁より続き）

結び

翌16日戦争記念公園（註1）でタラワ島での慰霊祭を盛大に挙行したが、その午後会長のお伴をして、井田団員と共に再び、ベシオ島に引き返し、前夜会長御自身、筆を執って「この箱の中に遺骨あり、取扱い注意」と英文で大書された白布を、遺骨格納木箱の上にかけて、テープで縛りつけ、その上に花を飾って保管の万全を期した。

註1　昨年の慰霊団の報告では、日本公園と呼ばれているとあったが、現地人数人に尋ねても、必ずしも日本という言葉を冠して呼んでいるようでもなく又現地新聞 Atoll Pienneer には戦争記念公園 The War Memorial Garden とあった。

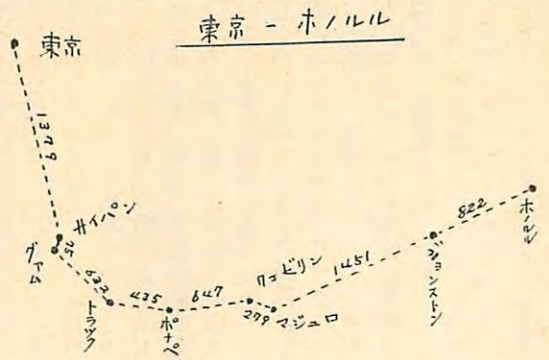
以上の次第で会長初め我々はこの遺骨に対して最善の処置をなして来たと信じており、後はスミス総督からの、連絡を待つばかりと考えている。

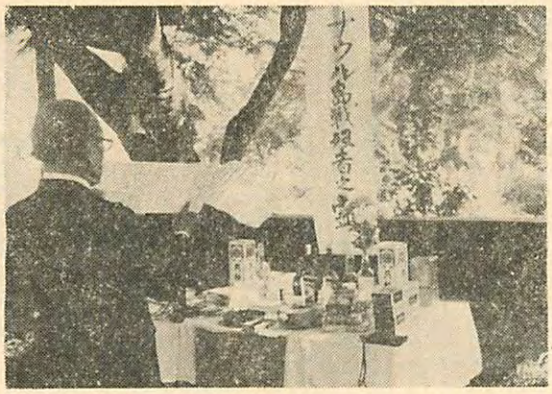
慰霊団に参加して(6)　桜代

○虹の橋

ゆきて還らぬ
みたまたち

（16頁1欄目関連地図）




ナウル島での慰霊祭（52・8・12）

ナウル島戦跡（52・8・12）

偶感

会長　浮田信家

8月17日午前6時オシンタイホテル12号室、既に熟睡の了った私はうつらうつら目がさめていた。窓の外はまだ暗かった。タラワ島の標準時では不思議ではないが、あまりの暗さについ夜明けを待っていた。このとき海側のドアーをノックする音があった。今頃何ごとかと怪んだ。やがて二回目のノック。それに答えてベットを降りた。団員の井田直忠君だった。

「会長、私は昨夜のお話から父の遺影に悩まされて一晩中考えました。そして今日の飛行機には、帰路は満員とのことでしたが、取消あるのを期待して単身マキンに行きたいと思います。万一皆さんにおくれたら単身帰国の旅費はこの通り持っております。私の携行品は全部同室の伊藤君に頼みました。どうかお許し下さい」

眼光炯炯。30余年前大戦中屢々体験した雰囲気である。10年前私自身同僚大部分が反対し忠告してくれたのを押しきってマーシャル、ギルバート行を断行した私である。井田君の気持は判りすぎるほど判る。瞬間私は諾とも否とも即答を躊躇した。

マキン島には十年前私が訪れたとき大変世話になり又昼食を共にしたピナウェアーシュターケさんやエリヤコアウさんの健在のことは、昨日ベシオ行連絡船で確めたばかりである。万一の場合は井田君の相談相手になってくれるであろう。従ってナウルまでは世話してくれるだろう。ナウル島につけばあとはジョン・ウイリーさんに世話がお願いできる。これだけの諸元が何秒間であったか頭の中をかけめぐって私の決心が固った。そして井田君に「会長の立場又現に団長として遠隔の地に在る私は承知出来ません。ただもしも私があなたの立場であったら同じことをしたでしょう。行くなら気をつけて行っていらっしゃい」と回答したがその途端同君の顔は明るくなって、まだ薄暗い海岸の浜に消えた。反対側のドアーは13号室とならんでおり、このドアーをノックすると隣室にもひびくので海側のドアーをノックした同氏の細心ぶりにも敬意を表し、成功を祈った。

朝食の時誰かが井田さんが見えないとの報告で一同驚いたが同室の伊藤君が、井田さんはマキンに向ったこと、団長や西田添乗員に届けにいったがノックをしても応答がないので自分だけに話していったと簡単な報告ですんだ。午後井田君はホテルに帰って来た。すぐに12号室に顔を出して「お蔭で無事マキンにいってまいりました。ありがとうございました」私は「おめでとう。父上様定めしお喜びでしたでしょう」報告も私の挨拶も簡単であった。

しかし同氏はこの挙を単身で行ったので同島の御遺族お一人お一人には同島で蒐集して来た貝、小石、砂をお頒した旨を後で聞いた。

周到な準備で断行し、極めて短い時間に現地慰霊・カメラと8ミリの撮影貝砂の採集を行われた39才の上州男児に対し敬意を表した。

慰霊団に参加して(7)　桜代

○つわものの勲を立てし
　環礁に立ち
故国恋ひし
　ときもありなん

第三回現地墓参希望者募集

会長　浮田信家

昭和50年8月行った第一回現地墓参（クェゼリン）のあと、これに参加できなかった方、或いはもう一度行きたいという方が多数あった。

本部ではこれをうけて、再度許されるなら、来年53年夏にでもと考えた矢先の52年10月1日コンチネンタル航空が次の航路を新設した。即ち東京→サイパン→グァム→トラック→ポナペ→クェゼリン→ジョンストン→ホノルル、帰路はこの逆、往復共週三回という本会にとり、所要日数の短縮、経費の節約上誠に好適のコースが出来た。

例えば火曜日の朝〇九三〇羽田を出発すると当日の二三一七マジュロ着。翌水曜日は充分休養して、木曜日の朝一一五四マジュロを出発するとその日の一七四五羽田着。往復の途クェゼリンに寄港する。往復の所要時間が違うようであるが、東京とマジュロとでは三時間の地方時間差があるためで正味の機上飛行時間は往復共7時間29分又5寄港地での休み時間は往復共2時間35分である。使用機はボーイング727機・旅客110名乗。（13頁地図参照）

航空運賃　東京～マジュロ間

往復（28日以内）一六八、八〇〇円

ホテル宿泊料（マジュロ）

一人一泊　15ドル～21ドル

（以上11月1日コンチネンタル航空東京支社につき調査）

この外若干の費用は必要である。

クェゼリン機密保持の峻厳さは二年前と全然変らず、ツーリスト（観光客）は機外遊歩も不許可又我々は既に一回墓参実施済であり、その後現地部隊幹部の交迭もあったので今回墓参が承認されるかどうかは確約は出来ない。この条件で参加希望の方は左の名簿資料を締切日（昭和52年12月31日）までに必着するよう本部に御送付願いたい。

1　参加希望者氏名（振仮名明記）
2　生年月日・男女別
3　現住所と郵便番号
4　電話（或は呼出）番号
5　戦死者の御氏名。戦歿場所
6　所属部隊名。お判りなら階級等
7　参加希望者と戦歿者の続柄

締切後の取消しは差し支えないが、追加はお受けできないことを承知願いたい。

募集員数はホテルの宿泊可能人員数によるので現在決定はできないが、今のところ二人部屋14室従って28名が最大の限度である。このため回答到着順で参加者を決定のことにしたい。

本行動に対する今後の必要事項の連絡は締切期日迄に申込済の方に限り、他の方には環礁29号迄はお知らせできないことを御了解願いたい。

◇参考（52・10・11朝日新聞夕刊）

米信託統治領のミクロネシア

日本企業―各島交渉へ始動

〔サイパン―青木特派員〕　米信託統治からの自立か、ミクロネシア連邦か―で揺れている「南洋諸島」のサイパンを中心とした北マリアナ地区で、10月1日から初の民選知事を決める選挙戦が始まった。一方、9月に南洋諸島を歴訪したカーター米大統領の特使、ローゼンブラッツ大使は「人権外交の原則にのっとって、パラオ、マーシャルとは個別交渉で、分離自立について10月中旬にも話し合う」との方針を明らかにした。日本、ミクロネシア関係も新段階を迎えようとしている。

サイパンとロタ、テニアンなど北部マリアナ諸島は、1981年（昭和56年）に「北マリアナ連邦」として米国の準州（自治領）になることが、住民投票で決まり、初の民選知事が、12月10日に選ばれる。選挙では「地域党」と「民主党」が正副知事候補をたて、自立政体への第一歩を踏み出した。ともに親米で、政見には大差はなく、自主独立路線を打ち出しているが、人口2万余の小諸島だけに、個人的な人気投票といった感じも強く、連夜、バーベキューパーティーを開いて支持者を集めているものの、静かな選挙戦ではある。しかしグァムに次ぐ、北マリアナ連邦の誕生近しで、ミクロネシアの「信託統治離れ」は急速に進んでいる。

ローゼンブラッツ特派大使は、パラオにまで出向き、地元の意向を聞いたが、日米による石油貯蔵基地の建設計画など経済的にも進んでいるパラオと、米軍ミサイル基地の増強でうるおうマーシャルの分離運動を抑えることはできなかった。同大使は9月末パラオでの記者会見で「人権外交の立場からも、住民自決を尊重する。個別交渉で将来の方針を話し合う」と表明、ミクロネシア米信託統治領の分解は決定的になった。

残るヤップ、トラック、ポナペ三地区は、経済的自立の道がとぼしいので現状維持か、「小ミクロネシア連邦」をつくるか、選択を迫られている。

こうした米国離れの傾向で、これまで国連や米国という窓口を通じてしか、地域開発や投資ができなかった日本企業は、自立政権の各島国家」と直接交渉ができるようになるので、いち早く活動を始めている。空港、港湾建の設、観光開発のためのホテル、土地買収が北マリアナ地区では活発になって反いる。住民の一部が環境破壊だと対しているパラオ北部の石油貯蔵基地構想も、そのひとつだ。

米国側は「ミクロネシアを戦略的に重視、精神的支持を惜しまない」としているが、経済開発は、日本まかせといった態度なので、かつての「南洋開発」熱がよみがえりそうな気配だ。

昭和五十三年二月六日（月）

慰霊祭　六日（月）　靖国神社
報告会　六日（月）　九段会館
直会旅行　六日・七日　霞浦・筑波
の御案内

恒例の二月六日前後の行事について御案内申上げます。

昨年八月、別項記載の通りナウル、ギルバート諸島へ慰霊団がまいりましたので、その報告会を開く関係上今年は前夜祭を行はないことにしました。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、宿泊月日、氏名、男女別、年齢をハッキリ書いて、**一月十日迄**に料金を添えお申込下さい。宿泊料は、一泊二食付一人三、九〇〇円です。

◎**定期総会と慰霊祭**（六日）

午前九時　受付開始　靖国神社
〃　十時　慰霊祭　〃
〃　十一時　定期総会　〃
正午　終了

◎**現地慰霊の報告会**（六日）

午後一時九段会館（二一一号室）
午後三時　（終了予定）

慰霊祭終了後、九段会館に移動し、昼食を共にしてから、ナウル島、ギルバート諸島現地慰霊団の報告会を開きます。8ミリの映写、録音テープ、写真などを準備しておきます。

報告会に参加される方は、昼食代として六〇〇円添えお申込下さい。

◎**直会旅行会**（六日・七日）

乗物　往復共大型観光バス
宿泊　茨城県　筑波山　江戸屋旅館
電話〇二九八六―六―〇三二一
費用　小学生以上一人一四、〇〇〇円
（六日の昼食、バス代、宿泊料、七日の昼食代、写真代共）
申込　一月十日迄に氏名、男女別、年齢を書き、料金添えお申込下さい。
申込順に受付けて、一月十日又は、一〇〇名に達した時締切ります。

◎**コース**　二月六日（月）正午、慰霊祭終了後直ちに、昼食弁当を積み込んでバスは靖国神社境内から出発します。首都高速、水戸街道を柏、取手、藤代経由土浦に着きます。海とも見える湖は霞ケ浦です。赤い血潮の予科練が、七ツ釦の胸にデカイ希望を抱いた所です。その遺品を収めた雄翔館（予科練記念館）予科練の碑などを見て、筑波スカイラインへ入り、筑波神社に参拝してから江戸屋旅館に着きます。

江戸屋旅館は、徳川三代将軍の頃創業という伝統ある旅館で、天狗鍋やガマの油売りの口上などが用意されております。ナウル、ギルバート諸島の8ミリも用意いたします。勿論そのあとは例年の通り楽しい直会となります。

二月七日（火）　バスは結城紬の本場、結城市にまいります。織元での見学は御婦人方の興味をそそることと思います。

次に栃木県益子（マシコ）の窯元塚本製陶で益子焼のできるまでの工程を見学し、昼食をとります。鹿沼土の本場、鹿沼を経て東北自動車道にのり、岩槻経由東京駅、九段会館に帰ります。

東京駅着は午後六時と予定していますが、道路事情で多少前後するかも知れません。

◎**見どころ**

○霞ケ浦　茨城県にある。面積一七八㎡、千年前に利根川の堆積によってできた日本第三の湖でワカサギ、シラスで知られる。大正九年、海軍航空隊予科練習部が追浜から阿見町に移転してきた。昭和に入って航空戦力の急速な充実が要請され、期待を担って昭和五年六月、十四歳の少年の一群が入隊した。全国から八十人に一人の競争に勝ってきた第一期飛行予科練習生である。その主任指導官は浮田本会々長であり、生存者達は今尚会長を「分隊長」と呼び麗わしい人間関係を続けており、本会のため黙々と御協力下さっているのは度々会報に報告された通りです。

○筑波山　東京から見える名山は「西に富士が嶺　東に筑波」で、均整の取れた山容は関東では第一級。

山頂の女体山（八七五・九m）と男体山（八七〇m）には夫々に、伊弉冉（イザナミ）命と伊弉諾（イザナギ）命をお祀りした筑波神社の奥宮がある。

○筑波山神社　創建は神代の頃とも伝えられ、桓武天皇の延暦元年に僧徳一が、知是院中禅寺を開いてから神仏習合により、筑波大権現といわれた。

明治初年の廃仏毀釈で堂塔伽藍が破壊され、明治八年現在の社号となった。

神橋、随神門は将軍家光の寄進。古来の山岳宗教の形式から山そのものを神として社殿は拝殿だけ。縁結び、夫婦和合の神社として信仰されている。

○結城紬　茨城県結城市の付近は桑園が多く養蚕が盛んで、一千年前から農家の副業としてツムギ織りが行われていた。その技法は無形文化財に指定されている。マユから真綿をとり、指先でツムギ糸を作って手織りでカスリやシマを織っている。高級和服地。

結城ちぢみは、ヨコ糸に強撚糸を使ってちぢみにしたもの。

○益子（マシコ）焼　栃木県益子町で焼かれる陶器。素朴・重厚が特徴。

元来農家向実用品であったが、五十年程前に浜田庄司先生が定住して制作を始めたことによって、民芸陶器の尖兵としての役を果した。

その作品は柳　宗悦、棟方志功、バーナード・リーチ等の激賞するところで、昔の野良用セトモノは、今や世界の美術陶器の座を占めるに至った。

新聞記事抜萃　一

中国新聞（五二・一・）

新春随想　環　礁

岡山県　薬師寺　理助
（岡山県民労部厚生課長）

年の暮。長い会議から解放されて机に帰ると、見なれぬパンフレットが置いてある。マーシャル方面遺族会の機関紙「環礁」の一月一日発刊号で、「太田援護課長から」とメモがついている。私にとっては、これは思いがけぬ贈りものである。

昭和17年秋。私の兄は南方の戦果に湧くなかを、兵科第二期海軍予備学生として出征し、翌18年の初秋、南方へ赴任。

おりおり、差し出し地不明の、しかしたしかに兄特有の、ドジョウが躍るような筆運びの手紙が父あてに来ていたことをおぼえている。

そして19年春、桜のつぼむ頃「内南洋方面において戦死」とだけの公報。「家内を亡くしたときよりも、わしの荷はずっと重くなる。」

お悔みをいってくれる人に父がそう話していたことを思い出す。母は私の四歳のときに亡くなっていたが、男兄弟二人の兄と私とが、あまりにも年が違っていたからであろうか。

昨年春、その父の17回忌と兄の33回忌を迎えるに当り、まとめて法要を営むこととし、あわせて、兄の戦死場所や戦死の模様を探ろうと思い立った。

南方の島々に遺骨収集団が派遣され、あるいは現地慰霊祭も営まれているこの頃のこと解らぬ筈がないと。

考えてみると、戦後、村に戦歿者遺族会ができると同時に、そして死亡するまで、その会長をやり、戦死者のかつての消息調べやら、弔慰金の受給権の有無などまで、まるで役場の出店まがいに遺族の世話をやいていた父にしては、どうして息子の戦死の模様などが気にならなかったのか。気になっても探ろうとしなかったのか。あるいは探ってもわからなかったのか。不思議に思えぬでもないが、たぶん、遺族会という場で、自分と同じ立場の他人様の世話をやくことが、父にとっては、かけがえのない老後の生きがいだったに違いない。

戦死場所探しは、まず県援護課への相談からはじめた。しばらくして、「マーシャル諸島、マロエラップ環礁タロア島において、敵機と交戦中被爆死」と判明。それを頼りに、現地からの生還者探しなどに汗してみたものの、それ以上はついに解らずじまい。

それでもおかげで、法要では、お参りの親族に、はじめて兄の戦死場所などを報告できて、祭主としての面目をほどこすことができた。

そうしたところへ、改めて、マーシャル方面遺族会の機関紙「環礁」の贈りものである。

戦後30年にして、父の最後の模様を知った遺児の綴る、興奮さめやらぬ思い。環礁に夫をなくし、三歳の子を形見として生きぬいてきた妻の訴えにも似た現地参拝の願い、どのページにも、肉親の模様を知ることができた人、あるいは遺族を探しあてることができた人たちの喜びと感激が満ちている。

さて、私もわが家の仏をまつる祭主とあれば、この遺族会への仲間入りを申し出てみよう。正月過ぎには、少々無理をしてでも暇をつくって、この遺族会のメンバーの幾人かをたずね、改めて亡父母に、兄の戦死の模様などを報告してみたいもの。

もっとも互いに、あの世ですでに語りずみかも。知らぬ仏は、実はこちらだけかも。

それよりは、と思ってみる。南海の環礁は、この厳冬も関係ない常夏のはず。いったい時間と金はどの位かな。などと。

新聞記事抜萃　二

日本経済新聞（五二・八・一一朝刊）

33回目の8・15

「一緒に帰ってこられなかった戦友たちの鎮魂のためギルバート諸島へ向かう人々」

羽田空港出発の写真（掲載）

「今年は慰霊祭や戦友会が盛んで、南方へ慰霊に向う人たちも多い」

「今年に入って靖国神社で行われた慰霊祭は六月までで、二百四十三件、参列者数一八二三三名。昨年同期間の慰霊祭は一五四件、一六八一八人だから件数では約六割増と大幅なふえ方だ」

「靖国神社では7月13日から16日までみたま祭を行ったが、献灯申し込みが昨年の四千個から五千個にふえた。電源の関係からお断りするのに一苦労でしたと神社ではいう」

そして遺族とのインタビューに、東京・葛飾区に住む主婦、長尾静子さん（註・本会々員）は9日午前、羽田発の日航機で、中部太平洋ギルバート諸島のタラワ島に向った。昭和18年11月同島で玉砕した軍医の兄芳樹さん（当時25歳）の慰霊のためだ。32年目にして初の巡拝である。タラワを含む中部太平洋の島々は米軍の侵攻進路に当り、約24万人の日本将兵が昭和18年から19年にかけて玉砕、遺骨も帰っていない人がほとんどだ。「沈丁花の花の咲く頃出征した」芳樹さんは「空の桐箱となって帰国した」。以来長尾さんは「兄の最期の地に立つことのみを考えて生きてきたという。30余年の空白はあったが、彼の地に立つことで亡くなった兄の苦しみを自得しようというのだろう」と述べてあった。

新聞記事抜萃　三

朝日新聞（五二・七・一六夕刊）

三十三回忌　悲しい〃史上最高〃

戦争の傷跡新た

東南アへ慰霊団も続々として

「16日は〝送り盆〟だが、今年は終戦の年に亡くなった人たちの33回忌。戦争が激烈になった昭和20年に亡くなった人は史上最高の数にのぼるといわれるだけに、各地で、33回忌法要や、慰霊祭が盛んだ。激戦地だった沖縄やフィリピンの戦跡はもちろん、赤道直下のナウル共和国、ギルバート諸島にまで巡拝慰霊団が出かけるほど。……略……

「遠いところではマーシャル方面遺族会が、八月十五日をはさんで、赤道直下の中部太平洋の激戦地ナウル共和国とギルバート諸島の英領タラワ、マキン島を巡拝する。個人的にこれらの戦跡を弔った人はいるが、33回を期して、やっと遺族や戦友そろっての巡拝が実現したという。」

寄付者芳名

（九一名）

本欄に掲載した会員各位は、すべて年度会費を完納の上の御寄付であり、本会運営上寄与するところ多く役職員一同いつも感謝申し上げているところであります。

特に先年のオイル・ショック以来公共料金率先しての上昇は、諸物価追従しての暴騰を招き、予ねて苦々しく感じております。本会も遂に二回の値上げのやむなきに至り53年度から年額二千円となってしまいました。本部でも一層節約を旨とし本務遂行に事欠かぬよう努力いたしますので今後共御協力いただきたく御礼と共に御願い申します。

（昭和52年6月1日から昭和52年10月31日までに入金の分）

篤志会員その他

二〇〇〇　香月　正紀殿
二〇〇〇〇　浦郷　久之殿
一二〇〇〇　長谷川　博殿
〃　井上　義夫殿
三〇〇〇　千葉　秀夫殿
〃　小林　重雄殿
二〇〇〇

◇北海道

一〇〇〇〇　妻　奥山　キノ
二〇〇〇　妻　安達　智恵

◇青森県

二〇〇〇　兄　池田　精治
一〇〇〇　妻　雫石　ハツ
〃　母　田中　ロク

◇宮城県

六〇〇〇　妻　新田富美子
一〇〇〇　妻　菅井わくり

◇秋田県

一〇〇〇〇　妻　奥山　キノ
一〇〇〇　妻　畠山　タカ

訂正　前回寄付者芳名中佐野敏子は佐藤敏子の誤りです。謹んで訂正いたします。

◇福島県

二〇〇〇　母　石幡サツキ

◇茨城県

一〇〇〇〇　母　大態　もと

◇栃木県

五〇〇〇　竹林　高男
一〇〇〇　弟　淀川　元弘

◇群馬県

一〇〇〇　弟　清水　宏一
〃　兄　畑佐　庄市

◇埼玉県

三〇〇〇　兄　幸島　敬一

◇千葉県

一〇〇〇〇　妻　津久井艶子
二〇〇〇　妻　立原　てい

◇東京都

一〇〇〇〇　妻　佐竹　エス
〃　弟　河野　勇一
〃　弟　土岐　達雄
〃　匿名　中村みさを
〃　母　水野　はな
〃　母　吉田　いそ
五〇〇〇　母　番馬　マサ
四〇〇〇　柳　嘉男
三五〇〇　松岡　厳
三〇〇〇　妹　宇田川ヒサ
二〇〇〇

◇神奈川県

二〇〇〇〇　鎌倉富三郎
一〇〇〇〇　弟　片山　計
九〇〇〇　佐野鉄太郎
五〇〇〇　兄　島田　正彦
二〇〇〇　妻　中村　サダ

◇新潟県

一〇〇〇〇　長男　高林　芳夫
四〇〇〇　父　安沢　隆平
二〇〇〇　兄　安中　久雄
一〇〇〇　兄　田村仙太郎

◇石川県

二〇〇〇　妻　前田　ナカ

◇山梨県

五〇〇〇　妻　平林　さん

◇長野県

一〇〇ドル　兄　田中　雄吉
三〇〇〇〇　母　田中ゆきゑ
一〇〇〇　兄　勝野仁一郎
〃　妻　鎌倉さかよ
〃　兄　田中　雄吉

◇岐阜県

二〇〇〇　母　寺沢喜美代
〃　妻　山田　八重
一〇〇〇　父　上森富次郎

◇静岡県

一〇〇〇　母　木野　せつ

◇愛知県

三〇〇〇　兄　柵橋　道広
一〇〇〇　母　小山内小美賀

◇大阪府

二〇〇〇　四男　柴崎　晃
七〇〇〇　姉　中野フヂエ

◇和歌山県

一〇〇　父　稗田新三郎

◇鳥取県

一〇〇〇〇　妻　藤原　照子
四〇〇〇　妹　井上　照美

◇広島県

五〇〇〇　妻　荒谷ミキエ
〃　妻　田口マサヨ
二〇〇〇　父　中山　道源

◇徳島県

一〇〇〇　妻　坂本　栞

◇香川県

一〇〇〇〇　長男　秋山　正清

◇愛媛県

一〇〇〇　妻　岡村　栄子

◇高知県

一五〇〇〇　兄　山本　誠章
三〇〇〇　妻　五百蔵国舜
一〇〇〇　妻　小松千代美

◇福岡県

六〇〇〇　妻　太田　菊江
五〇〇〇　妻　村山キヨノ
二〇〇〇　父　杉山　柳平
一〇〇〇　兄　一木　貞利
〃　姉　川上ミサヲ
〃　妻　森　キヨ子

◇佐賀県

九〇〇〇　妻　宮崎　ツヨ
二〇〇〇　母　大串　サキ

◇長崎県

四〇〇〇　兄　小川　直衛
一〇〇〇　父　板浦弥一郎
〃　妻　森川　チノ

◇熊本県

一〇〇〇〇　妻　植村よしえ
二〇〇〇　父　平野芳太郎
〃　父　松野　文治

◇宮崎県

四〇〇〇　妻　土工あぐり
二〇〇〇　母　杉田ヨシノ
〃　妻　山内　キク
一〇〇〇　妻　山口　ミワ
〃　姉　高山チサ子

◇鹿児島県

一〇〇〇　妻　黒岩キミエ
一〇〇〇　弟　出花　利文

事務局だより

○クェゼリン環礁米ミサイル基地司令官更迭

新司令官 Colonel Earnest A. Van Netta

前任の Colonel R. L. Russel には本会を深く信頼され、特に昭和50年度第一回の現地墓参につき格別の御斡旋いただいたこと深く感謝します。

○ナウル領事交代

昭和52年夏本会現地慰霊団出発時お世話になったクリフォード・サイモン氏は8月下旬転任、帰国。後任は Mr. Ivan D. Dedogi（イバン・D・デドジ氏）。領事館所在は従前通り。

○次の諸行事には毎年招待状が送られて来ます。

靖国神社春季例大祭当日祭　四月二十二日
みたままつり　（七月十三日　七月十六日）
東京都戦歿者追悼式　八月十五日
靖国神社秋季例大祭当日祭　十月十八日

東京都南方地域戦歿者追悼式

日時　毎年十月下旬

行動予定（52年度の例・以下同）

第一日　午前羽田空港発。那覇空港着・ひめゆり塔の外2カ所参拝、午後「東京の塔」追悼式参列　午後5時、那覇東急ホテル着。

第二日　午前9時ホテル発、中央納骨所外4カ所参拝。午後5時東急ホテル着。

第三日　午前9時ホテル発。北谷外8カ所参拝、巡訪。午後5時東急ホテル着。

第四日　午前中自由行動　午後1時ホテル集合。午後4時30分那覇空港発。午後6時50分羽田空港着。解散

員数　代表遺族本会は二名

総経費　八七、〇〇〇円　内訳

航空賃・往復	四八、九〇〇円
ホテル代・3泊	二四、〇〇〇円
バス代	五、〇〇〇円
記念品代	二、八〇〇円
昼食代	二、八〇〇円
ワッペン・しおり	一、五二〇円
入場料	一、一八〇円
雑費	八〇〇円

経費の一部補助　代表遺族に対し都からの補助一名につき　三〇、〇〇〇円

参加或は参列希望の方は、本部あて早目にお申込み下さい。

謹賀新年

昭和五十三年元旦

◎本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香鳩彦	篤志会員
相談役	朝香孚彦	篤志会員
会長	浮田信家	篤志会員
副会長	佐藤宗丕	篤志会員
常任幹事	井上賀雄	篤志会員
常任幹事	佐竹エス	篤志会員
常任幹事	荒木常子	篤志会員
幹事	秋山正清	篤志会員
幹事	宇田川ヒサ	篤志会員
幹事	岡野正文	篤志会員
幹事	片山計	篤志会員
幹事	木下満子	篤志会員
幹事	木村久子	篤志会員
幹事	国松ふみ江	篤志会員
幹事	小泉文江	篤志会員
幹事	柴崎晃	篤志会員
幹事	高橋功	篤志会員
幹事	高橋鎮夫	篤志会員
幹事	高林芳夫	篤志会員
幹事	土岐達雄	篤志会員
幹事	橋口昭利	篤志会員
幹事	山浦信子	篤志会員
監事	末広正男	篤志会員
監事	大高吉郎	篤志会員
監事	昼間楽平	篤志会員
	板垣徹	篤志会員
	大野克一	篤志会員
	嘉村栄	篤志会員
	木ノ下甫	篤志会員
	ウイリアム・エス・ケイス	篤志会員
	ジョン・ウィリース	篤志会員
	瀬沼光久	篤志会員
	千葉秀夫	篤志会員
	土屋太郎	篤志会員
	徳原勇	篤志会員
	同徳子	篤志会員
	中島昌彦	篤志会員
	中田虎一	篤志会員
	成田喜代治	篤志会員
	西村祐造	篤志会員
	長谷川栄次	篤志会員
	長谷川敏	篤志会員
	林幸市	篤志会員
	松平永芳	篤志会員
	村岡達志	篤志会員
	横溝幸四郎	篤志会員
	安藤サヨ	篤志会員
	白鳥悦子	篤志会員
	本木光江	篤志会員

（2頁の続き）

太田清・荻島佐吉・小柳津基・小作イキ・桜井一正・下里昭・津久井艶子・塚原ハナ・中島新之丞・中島剛・長尾静子・星川武・水野はな・谷沢英子（ナウル班）今成秀忠・江村源次・副団長香月正紀・土岐正（日本交通公社添乗員）西田悠治・計26名

本部
郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話（東京）四二四一四三〇〇番